

皆さん、ご入学・ご進学おめでとうございます。経済学研究科長の清水と申します。まずは、教員を代表して、皆さんを歓迎したいと思います。

今後の大学院での研究や生活に期待が膨らんでいることと思います。皆さんはこれから経済学研究科で学び、研究し、その成果をあげてほしいと思います。

本研究科には 38 名の教員がいて、ひとりひとりの先生方はそれぞれの専門分野の研究と、それにもとづいた講義をしています。それぞれの指導教員の演習に参加していただき、専門分野の研究を進めてほしいと思います。

大学院では、教科書や論文を読んで、専門分野の知識をえ、その考え方を理解していくことがまず必要になることです。学問に王道はないと言いますが、十分な時間をかけて読んでいくという地道な作業に取り組んでいく他はないと思います。

分野にもよりますが、頭の中で考えているだけでは、なかなか身につかないこともあります。紙に書いて、手を動かして、スキルを身に着けたり、考えをまとめたり、明白にしたりしていくことも重要です。

また、同じ学年や同じ演習の中で仲間をつくって、ディスカッションを通じて議論を深め、切磋琢磨していくことも大きな意味のあることだと思っています。

研究活動において最も重要なことは、いろいろありますが、今日は特に、問題意識ということ強調しておきたいと思います。特に、論文を書く際には、問題意識のない論文は読んでもあまりおもしろく感じないし、発展性を感じることがありません。何よりも、何も問題がないことを取り上げて、論文を書くとしたら、それは至難の業でしょう。なにがしかの問題意識というのはあるのだと思いますが、各分野においては注目を集める問題意識というものも存在していると思います。そうした問題意識のもとで研究するほうが研究はやりやすいのだと思います。ただ、注目を集める問題意識だからといって、何でもいいというわけでもないでしょう。

同時に、批判についても、それを怖がらず、時には、批判し、時には、批判を受け入れるという姿勢を身に着けていってほしいと思います。

最後に、バートランド・ラッセルの言葉を皆さんに送りたいと思います。

「私は文章をどのように書くべきかを知っているとはいえないし、偉い批評家が私の文章を直そうとして、どんなことを忠告するか知らない。私のできる最大のことは、自分自身でやったことについて語ることである。」

これは「私はいかに書くか」というエッセーの中の言葉です。ラッセルも言っていますが、論文を書く作業の中では、重要な誤りを見つけて全体を書き直す必要が生じたり、やろうとしていることが自分の手にあまるように見えたり、不満足な試みを積み重ねてもすべてを投げ出さなければならなかったりと、様々な困難が起こりえます。しかしながら、私も、自分自身でやったことについて語ることは誰にでも認められることであると思っていますし、自信をもってそれを成し遂げられる人になってほしいと思います。簡単ではございますが、以上をもちまして私からのご挨拶とさせていただきます。

2024 年 4 月 2 日

第2講義室

名古屋大学大学院経済学研究科長

清水克俊